第４章

ダリトパンタル運動

目　次

はじめに
１．マハーラーシュトラ州のダリト運動史
２．ダリトパンタルの誕生
３．ダリトパンタルの活動（前期）
４．ダリトパンタルの活動（後期）
おわりに

石田　英明

はじめに

今年（1997年）、インドは独立50周年を迎えた。その独立記念日（8月15日）を間近にひかえた7月11日、ムンバイ（旧称ボンベイ）市で一つの事件が起こった。ムンバイ市の郊外にガートコーパル（Ghatkopar）と呼ばれる地区がある。そこは労働者の多い地域であるが、その一角にあるラマーバーイー・アンベードカル・ナガル（Ramabai Ambedkar Nagar）は、住民約 3万5000人のうち90% 近くを仏教徒[1]や指定カースト[2]など貧しい人々が占めている[3]。仏教徒や指定カーストの人々が多く住む地域には、彼らの解放運動の象徴であるB.R.アンベードカル博士[4]の像が立っていることが多く、この地区もその例外ではない。7月11日の朝、その像にゴムぞうりを連ねて作った輪が掛けられているのが発見された。こうした行為は明らかに、アンベードカルと彼を信奉する人々に対する侮辱と挑発であって、ラマーバーイー・アンベードカル・ナガルの人々はただちに抗議行動に立ち上がった。この抗議行動がどの程度の規模と激しさのものであったのかは、関係者の主張に隔たりがあるため、はっきりとしたことは言えないが、投石、通行妨害、車輌破壊などが行われたらしい。もちろん、警官隊も出動してきたが、一般的にはここまではよくあることで、ここで終わっていれば、よくある事件の一つとして終わっていたかもしれない。ところが、事件は思いがけない方向へ展開した。警官隊がかなり無差別的な発砲をしたのである。その結果、現場において、死者10名、負傷者43名を出す大事件に発展した[5]。

ある週刊誌はアンベードカル像や仏像を冒瀆するこうした事件がマハーラーシュトラ州[6]で近年多発していると伝え、その原因をインド人民党

(BJP)[7]とシヴセーナー党（Shiv Sena）[8]による州の連立政権に求めようとしている[9]。原因についてはともかく、この事件を一般的な言葉でまとめると、独立後50年を経た今日も、カースト問題に起因する事件は、その時々の政治的、経済的、社会的等々の要因によってその様相を変えながらも、基本的な構造では変わることなく続いているということである。

記念すべき独立50周年（Golden Jubilee）を迎えたインドにおいて、上記の事件がマハーラーシュトラ州におけるダリト運動[10]の象徴的事件になるかどうかは今後の展開を待たねばならないが、同じく記念すべき年であった独立25周年（Silver Jubilee, 1972年）はマハーラーシュトラ州のダリト運動が大きな転機を迎えた象徴的な年であった。この年、ボンベイ（当時）のダリト青年らが結成したダリトパンタル（Dalit Panthar）は、当時沈滞していたダリト運動に新たな活力を注ぐとともに、新しい活動分野を切り開いて、70年代のダリト運動をリードしたのであった。本章においては、主に70年代に活躍したダリトパンタルの活動に焦点を当てながら、マハーラーシュトラ州のダリト運動の過去を振り返り、現状における問題点の理解への一助としたい。

1. マハーラーシュトラ州のダリト運動史

(1) 19世紀の社会改革運動

18世紀のマハーラーシュトラ地方にはマラーター王国[11]が栄えていたが、その実権を握っていたのはバラモンの宰相（ペーシュワー）であって、国内ではバラモンが優遇され、保守的なヒンドゥー教の思想や慣習が人々の生活を律していた。1818年にイギリスがマラーター王国を倒して、植民地統治を

始めると、インド人の側からも近代化に向かう動きが起こり、19世紀後半には社会改革運動が盛んになった。それらの運動の主なものは、ヒンドゥー教の改革運動と「反バラモン運動」であった。

ヒンドゥー教の改革運動はベンガル地方が先鞭をつけたが、マハーラーシュトラ地方では1830年代にザーンベーカル（B.G.Jambhekar 1812-46）がヒンドゥー教徒の無知や偏見を批判して口火を切った。40年代末にはロークヒトワーディー（'Lokhitvadi'G.H.Deshmukh 1823-1892）がカースト制とバラモンを厳しく批判し、人は生まれによって評価されるべきでないと主張した。1848年にはパーンドゥラング（D.Pandurang Tarkhadkar 1814-1882）がパラムハンス協会（Paramhams Sabha）を設立し、異教徒の供する料理を食する会を企画して、ヒンドゥー教徒の差別意識を克服しようとした[12]。

ヒンドゥー教の改革運動のもう一つの柱は女性の地位向上運動であった。この運動に積極的に取り組んだのはラーナデー（M.G.Ranade 1842-1901）らが1867年に結成したプラールトナー協会（Prarthna Samaj）で、寡婦の再婚や女子教育の普及、幼児婚の禁止などを訴えた。中でも議論の的となったのは寡婦の再婚問題で、寡婦を不吉なものと考えるヒンドゥー教の偏見が批判の対象となった。

上記の改革運動が主にバラモンなど社会の上層部を対象としていたのに対し、「反バラモン運動」はいわゆるシュードラ階層を対象とし、彼らに行動を起こさせた運動であった。この運動は文字通り、ペーシュワー政権下で優遇され大衆を宗教的にも経済的にも支配してきたバラモンに対抗しようとする運動で、バラモンが権利を独占していた分野に非バラモンの人々が進出しようとするものであった。例えば、結婚式などの儀式において、バラモンが独占していた司祭職を当事者のカーストの者が代行するなどというものである。これは単にバラモンの権威を否定するだけでなく、司祭職を専門職にしている一部のバラモンにとっては経済的な打撃となった。こうしたことを運動にまで高めたのはジョーティラーオ・フレー（Jotirao Phule 1827-90）であ

った。

フレーは野菜や花の栽培を本来の生業とするマーリー=カーストの出身である。彼は農民の悲惨な状況を身近に見て、政府とバラモンと金貸し（バラモンが多かった）という三つのくびきがある限り、下層民はこの世の生き地獄から解放されないと訴え、社会のいろいろな場面でバラモンを排斥しようとした。そして、その運動を推進するため、彼は1873年、「真理探求者協会」（Satyashodhak Samaj）を設立した。

フレーのもう一つの画期的な業績は不可触民や女子のための学校を建てたことである。全てのカーストに開放された学校は既に1836年に開校しているが、1839年の調査では、そうした61の学校に在学する759人の生徒のうち、不可触民は僅かに17人にすぎない[13]。そういう現実の中で不可触民の教育の重要性を訴え、実行に移したフレーの思想と行動は、不可触民解放運動の先駆であると評価されるに充分値したものであった[14]。

以上のように、19世紀のマハーラーシュトラでは、社会の上層部を対象にした運動から下層民に行動を促した運動まで幅広い改革運動が存在し、不可触民の地位向上も訴えられた。次に当の不可触民側の対応がどのようであったのかを見てみよう。

(2) マハール=カーストと初期のダリト運動

マハーラーシュトラ地方の不可触民のうち、解放運動に最も積極的に取り組んだのはマハール=カーストであった。マハール=カーストの本来の業務は、言わば村の雑用係のようなもので、何かの専門職ではない。かつてのマハールは普段は農業労働者で、村の人々の雑用全般に使われた。当番制で番が回ってくると、やや公的な任務があり、村の番人、村長や役人の使い走りなどをする。死んだ家畜の処理はマハールの重要な任務であった。女性は産婆などもしたりした。

19世紀の後半になると、村の余剰労働力であったマハールは村を出て、鉄道建設の作業員、繊維工場の労働者、港湾労務者などになった。また、軍隊に入ったり、イギリス人の家庭の召使になる者も多かった。マハールがカーストとしての専門技術を持たないことが、村の拘束を断ち切り、新しい環境に飛び込むのを却って容易にしたのであった。これらの変化によってマハールは新しい世界と価値観に目覚め、教育の重要性を理解するようになった。フレーが女子のための学校（1849）や不可触民のための学校を開いた（1852）ことは上に述べたが、やがて政府もそれを真似て不可触民のための学校を開設するようになった。20世紀に入ると、コーラープールやバローダーの藩王が不可触民の教育と地位向上に理解を示し、V.R.シンデー（Vitthal Ramji Shinde 1873-1944）やK.B.パーティール（Karmvir Bhaurav Patil 1887-1959）らの人々も不可触民の教育に情熱を注いだ[15]。このようにして、人数は僅かながらも、不可触民の間に教育が広まり、マハール=カーストがその先頭に立ったのであった。

マハール=カーストの地位向上や人権擁護について、最初に声を上げたのは19世紀末のワラングカル（Gopalnak Vitthalnak Walangkar 1840-1900）であった。退役軍人のワラングカルはフレーの思想に共鳴して、1890年「非アーリヤ人罪障除去協会」（Anarya Dosh Parihar Samaj）を設立した。また、1888年にはインドで初の不可触民のための新聞『穢れの破壊者』（Vital Vidhvansak）を発行した。ワラングカルの活動で最も知られているのはマハールを始めとする不可触民の軍隊への採用を再開してほしいと植民地政府に嘆願書を提出した件である。政府は1892年に軍隊の採用計画を変更して、不可触民の採用を中止し、後には現役の不可触民の軍人にも退役を勧告した。ワラングカルはこれらのことに対して、1894年、嘆願書を提出したのであった[16]。

20世紀に入ると、プネーのS.J.カーンブレー（Sivram Janba Kamble 1875-1940）らは、軍隊のみならず、警察や公務員への採用も求める嘆願を起こした。1910年にはデカン地方のマハール大会を開催し、イギリス本国にまで嘆

願書を送っている[17]。

現在のマハーラーシュトラ州東部に位置するナーグプールを中心とした地域はヴィダルバ地方と呼ばれ、当時は中央州（Central Province）に属していた。この地域で最も早く活動を開始したのはK.F.バンソード（Kisan Fago Bansod, 1879-1946）であった。彼は1901年に「不可触民正道会」（Sanmarg Bodhak Asprshya Samaj）を設立し、1907年には不可触民の女子のための学校を開いた。また、印刷所を持って、新聞などの出版活動も行った[18]。

総じて言うと、アンベードカルが登場してくる1920年頃までの運動は、政府への嘆願と教育活動、及び自分達の生活習慣改善のための啓蒙活動が主流であって、カースト・ヒンドゥーと正面切って対立するところにまでは至っていなかった。

(3) アンベードカルと仏教改宗

アンベードカルは2度目の留学からの帰国（1923）後に、本格的な活動を開始した。彼が運動を指導するようになって生じた変化は、カースト・ヒンドゥーとの対立が激しくなったということで、それは即ち、彼の指導した運動が不可触民制を支えているヒンドゥー教の根幹部に関わっていたということである。歴史上有名な27年のマハード・サティヤーグラハ（ツァオダール貯水池闘争）[19]や30年に始めたカーラーラーム寺院立ち入り闘争[20]などはいずれもカースト・ヒンドゥー側の激しい反発を招き、差別の壁の厚さを再認識させたのであった。32年、選挙制度を巡ってガーンディーに妥協を強いられた[21]ことにより、アンベードカルはヒンドゥー教の内側にいて解放運動をすることの無意味さを痛感し、ヒンドゥー教を棄てる決意を固めた。その決意を表明した35年以降、アンベードカルは政治的な力をつけることに活動の重点を移し、36年に独立労働党（Independent Labour Party）を結成した。第2次世界大戦が始まると、アンベードカルは早々とイギリス支援を表明し、不

可触民の権利獲得を有利に進めようとした。長らく途絶えていたマハールの軍隊への採用が復活したのもこの折りであった。しかし、第2次世界大戦中、会議派が反英の立場を鮮明にし、国民の多くが会議派を支持していた状況において、アンベードカルの行動は一般大衆にはカーストの利益のみを追及しているように映っていた。46年の州議会選挙でアンベードカルの率いる指定カースト連盟（Scheduled Caste Federation）が大敗を喫したのには、そういう事情に因るところもある。

新生インドにおいて、アンベードカルが中央政府の法務大臣に抜擢され、憲法の草案作成に関わったことは大きな出来事であったが、地元マハーラーシュトラにおいては、指定カースト連盟はマハール・ワタン[22]廃止問題以外に特別な活動計画もないままに、支持を減らしていった。1952年の総選挙でまたも大敗したアンベードカルは、政治に対する望みは捨てなかったが、現実的な課題として改宗問題の方に関心を寄せていった。

1956年10月14日、アンベードカルは数十万人の人々（殆どがマハール）と共に仏教に改宗した。アンベードカルが仏教を選んだのは、仏教の教理が合理的で、人が平等に扱われていること、また、インドで生まれた宗教で、インドの歴史に定着しているなどの理由によるが、もう一つ、マハールの歴史に関する大きな理由が挙げられている。それによると、マハールはマハーラーシュトラの先住民ナーガ族で、元々、仏教徒であったが、外来のヒンドゥー教徒に支配されたために、仏教を捨て、不可触身分に落とされたという。従って、仏教に改宗するのは先祖の宗教に戻ることであって、即ち、本当の自分を取り戻すことなのである[23]。この説明がどの程度史実に基づいているかは分からないが、改宗によって自分のアイデンティティーを回復できるということが、マハール=カーストの人々にどれほど大きな自信と喜びを与えたかは容易に想像できる。

アンベードカルは改宗の約2カ月後の12月6日に死亡したが、彼の死は二つの大きな課題を残した。一つは仏教をいかに定着させ、かつ広めるかという課題である。この課題には仏教改宗によって社会生活上どういう変化が生じるか、その変化にどう対応するかという問題も含まれていた。もう一つの課題は共和党結成についてであった。

(4) 共和党

指定カースト連盟として戦った1952年の選挙での敗北により、アンベードカルは指定カーストのみが団結しても大きな政治勢力になりえないことを実感した。指定カーストだけではなく、より広範な後進階層や被抑圧階層を結集した新しい政党が必要であった。彼はその党を広範な勢力の結集という意味から共和党と名付けていた。しかし、この計画は彼自身の急死によって中断を余儀無くされ、ようやく仏教改宗から約1年後の1957年10月3日に共和党（Republican Party of India）が誕生した。

共和党の初代党首はタミルナードゥのN.シヴラージ（Namoshivayam Shivraj 1892-1964）であった。党は集団指導体制がうまく機能して、はじめの2年間は黄金時代と呼ばれるほどであったが、59年には早くも最初の分裂が起こった。それは統一マハーラーシュトラ協議会（Samyukt Maharashtra Samiti）[24]との関わりや党の運営をめぐる世代間の主導権争いによるもので、若手のB.C.カーンブレー（B.C.Kamble）らが真正共和党（Durust Ripablikan Paksh）を結成した[25]。

主流派の共和党はD.ガーエクワード（Dadasahab Gayakwad 1902-1971）が中心となって、59年7月に農地獲得運動（Bhumihin Satyagraha）を開始した。この運動は主にマハーラーシュトラ北西部のカーンデーシュ地方を中心に行われ、10月には休耕地の分配を州政府に約束させるという成果を上げたが、実行が伴わず、中途半端に終わってしまった[26]。そこで1964年、この運動を全国的に再開することにして、10月、デリーで10万人がデモ行進を行い、12月からは全国的に闘争を展開したので、65年に入って中央政府のシャースト

リー首相は要求を認めた。しかし、やがて第２次印パ戦争が勃発したため、農地の分配はまたもうやむやに終わってしまった[27]。こうして２次にわたる農地獲得運動は着実な成果を上げることはできなかったが、共和党の歴史において、この運動が最も華々しい運動であった。

この後、60年代後半からの共和党は分裂抗争と政治的取り引きがもっぱら話題になるような政党になった。ボンベイ支部長として長く活躍したR.D.バンダーレー（R.D.Bhandare）は統一マハーラーシュトラ協議会との選挙協定や人事の不満から65年に離党し、国民会議派に鞍替えした。67年の総選挙では党首ガーエクワードは会議派との協定を目指したが、失敗し、統一マハーラーシュトラ協議会と選挙協定を結んで惨敗した。同年の州議会選挙では会議派との協定にこぎつけ、獲得議席数では躍進したが、アンベードカル以来の宿敵である会議派と結んだことは支持者を大いに困惑させた。さらに、政権党である会議派と結んだことにより、与党のうまみを知った議員たちは政治的取り引きによって地位や利権を追い求めるようになり、ますます支持者の信頼を失った。70年には、これも人事の不満に端を発して、長らく党書記長などの要職を務めたコーブラーガデー（R.Khobragade）が離党し、コーブラーガデー派共和党を結成した。一方、ガーエクワード派共和党はガーエクワードの死（71年）後、ガワイー（R.S.Gawai）が党首となり、会議派との連携をますます強めた。その同じ71年に、かつて真っ先に離党し、分裂抗争の先駆者となったB.C.カーンブレーが諸派の統一を呼び掛けたが、誰一人応じる者がないという有様であった。各派が入り乱れて戦った結果、71年の総選挙では当選１名、72年の州議会選挙でさえ当選１名[28]という大惨敗を記録し、共和党は存在自体が危ぶまれるほどの凋落ぶりとなった[29]。

2. ダリトパンタルの誕生

(1) 背景

前章で見たように、60年代後半に始まった共和党の凋落傾向は70年代に入っても歯止めが掛からず、共和党は不振のどん底に喘いでいた。仏教徒やマハール=カーストを中心とする支持者の期待は大きいのに、それに応えられる指導者や組織がないという状態であった。支持者の期待には切実なものがあった。全国的に60年代の後半から農村部においてダリトへの暴行事件が増大し、67年から69年の間に殺害されたダリトの数が70年に国会で報告されるほどであった[30]。R.ダーレーはイラヤ=ペルマル報告をもとに当時の約１年半の間に1117人のダリトが地主によって殺害されたと述べた[31]。農村では農業労働者の賃上げ要求などをめぐって、地主と農業労働者の緊張が高まっており、農業労働者の多くが指定カーストであることから、彼らに対する傷害事件、女性への暴行、社会的ボイコット（商品を売らない、井戸や道路などを使わせない、農作業などに雇わない）などが相次いで行われた。マハーラーシュトラでは指定カーストのうちマハールと仏教徒が最も人権意識に目覚め、政治的発言も多く、また、指定カーストの優遇策をうまく活用して生活を向上させる者も少なくなかった。このため、こうした事件が起こると、マハールと仏教徒が攻撃の対象とされることが多かった。少し事例を挙げると、70年にはナーグプール近くの村で、コレラが流行する原因になったとして、仏教徒の青年が生け贄にされた。72年にはパルバニー県のブラーフマンガーオ村で、カースト・ヒンドゥーの井戸を使ったとして、２人の仏教徒の

女性が裸で村中を引き回された。同じく72年、プネー県のバーオダー村では仏教徒の青年が県議会選挙に立候補したことを村の伝統に対する重大な挑戦と受けとったカースト・ヒンドゥーが村の仏教徒に対し社会的ボイコットを行ったなどという事件があった[32]。こういう事件に対し、共和党は都市部で抗議の声を上げても、村落部で抗議行動に立ち上がることは少なかった。それは、日頃から村落部での活動が手薄になっているからで、村落部のマハールや仏教徒の孤立感と不安感は大きく、共和党への失望感が広がっていた。

一方、都市部はどうであったか。71年にはマハール人口の約15%が都市部に住んでいた[33]。その多くは労働者である。当時はインフレと失業が進行し、労働者は苦しい生活を強いられていた。そうした状況の中で、右翼的な民族政党であるシヴセーナー党が支持を伸ばし、共和党の支持者にも食い込んでいた。共和党は仏教徒や指定カーストへの優遇策の拡大を政策の柱として、支持者離れを食い止めようとしたが、支持者をしっかり繋ぎ止めるだけの力は残っていなかった。

都市には労働者の他に、学生も多い。彼らの多くが田舎から出てきており、彼らを送り出すために田舎の家族は大変な苦労をしなければならなかった。71～73年は激しい飢饉に見舞われた年で、72年にオウランガーバードのミリンダ・カレッジが行った調査では、多くの学生の親たちが飢饉の被災者用の救済キャンプで働いており、調査した学生のほぼ3分の2の親が子供に大学をやめて働いて欲しいと頼んだという実態が報告されている。J.ゴークレーはこの経験によって学生は自分の将来に展望がないことと、この現実は体制を根本的に変えない限り不変であることを自覚したと述べている[34]。

60年代から70年代初頭の学生はインドの独立後に育った第1世代であって、自由・平等・人権などに関して進んだ意識と理想を持っていたが、インドの現実は彼らの理想を打ち砕くものであった。現実と理想のこのギャップを彼らは文学に表現し、捌け口を政治活動に求めた。ベンガル文学の「飢えた世代」、テルグー文学の「裸の詩」などと並んで、マラーティー文学では

「小雑誌」(Little Magazine) 運動が60年代の反体制的な青年たちの文学運動になった。後にダリトパンタルをリードしたラージャー・ダーレー、ナームデーオ・ダサールらはこうした「小雑誌」運動から出てきた青年であった。また、60年代末にはダリト文学も確立し、ダリト青年に自己表現の場を提供した[35]。一方、政治的な団体には社会主義青年会議 (Samajwadi Yuvajan Sabha)、青年戦線 (Yuvak Aghadi)、青年革命党 (Yuvak Kranti Dal) などがあって、青年たちの行動の場となった[36]。

以上、ダリトパンタルが誕生した頃の状況を述べた。要約すると、社会的緊張から各地で暴行事件が多発し、ダリト大衆が危機に晒されていたが、共和党にはダリト大衆を守る力がなかった。都市部のダリト青年はこの危機的状況に立ち向かうため、文学活動を越えた社会運動を自ら起こしていった。これがダリトパンタルを生み出したのであった。

(2) ダリトパンタルの誕生

ダリトパンタルの結成は1972年7月9日となっている。ナームデーオ・ダサールによると、当時、ダサールはジョージ・フェルナンデスとの関係で統一社会党にいたが、フェルナンデスがカースト問題に興味を示さないため、カースト問題で行動する団体を自分で作ろうと思い、J.V.パワールと2人でダリトパンタルを結成することにしたという。結成予定が『ナワーカール(新時代)』紙に発表されたのは6月19日のことであった。その後、結成大会の宣伝をするうちに仲間が増え、7月9日にスィッダールタ・ナガル (ボンベイ) で盛大に結成大会を行った。最初の創設メンバーの数をダサールは13名としている。そこには、ラージャー・ダーレーは入っていない[37]。

アルジュン・ダーングレーによると、バーブラーオ・バーグールの回りにいたダリト文学の青年たちは、スィッダールタ・カレッジの学生が中心になって結成した青年戦線に加わって行動を起こしていたが、青年戦線が行き詰

まったため、アメリカのブラックパンサーにヒントを得て、7月9日にダリトパンタルを結成したとしている[38]。プララード・チェーンドワンカルも青年戦線からダリトパンタルが生まれたとしているが、その名称になったのは8月23日より前のことではないとしている[39]。また、J.ゴークレーはスィッダールタ・カレッジの学生を中心とした青年革命党（YKD）の会合がダリトパンタルの結成に貢献したとしている[40]。これらは恐らく、いずれも事実の側面をついているのであろう。当時、いろんな団体や組織があって、それらに重複して参加しているうちに、ダリトパンタルの結成にも関わることになった人が多かったのであろう。

ダリトパンタルという名称は、アメリカの黒人運動の団体であるブラックパンサー（Black Panther）からヒントを得て、ダサールがそのアイデアを出したとされている[41]。命名の意図するところは闘う組織という性格を表すことにある。ダサールは当時、バーオダー村で起こったボイコット事件（122ページ参照）を気にかけていた。こういう事件に対し、抗議運動を起こせるような組織をダサールは求めていて、その思いは日頃活動に参加しているダリト青年に共通のものであった。攻撃を受けているダリトを守って闘う組織を結成すること、これがダリトパンタル結成の最大の動機であった。

(3)『サードナー』事件

ダリトパンタルがボンベイで産声を上げたばかりの時に、ダリトパンタルの名をマハーラーシュトラ中に広めたのは、プネーの『サードナー』誌（72年8月15日号）に掲載されたラージャー・ダーレーの一文であった。『サードナー』誌の8月15日号は独立25周年記念号であったが、ダーレーの他にダーングレー、チェーンドワンカル、ダヤー・パワール、トリャンバク・サプカーレーらダリト文学の気鋭の若手が寄稿していて、さながらダリト文学特集の観があった。問題になったのはダーレーの「暗黒の独立記念日」という文

である。ダーレーはまず、ダリト運動の最近の発展を紹介し、ガオレーとモーレーという2人の青年がそうした運動の中から育ってきたという。この2人は、ダリトに対する暴虐と政府の無策に抗議するためボンベイの州議会場に火炎瓶を投げ込んだのであった。こういう行為はダリトでなければ行わないのであって、それはダリトの痛みはダリトにしか分からないからである。バラモンが人口の点でいくら少数派であるといっても、ダリトとは訳が違う。「……ブラーフマンガーオ村（6ページ参照）ではバラモン女性がサリーを剝ぎ取られることはない。剝ぎ取られるのは仏教徒の女性である。そして、それに対する刑罰は1カ月の禁錮または50ルピーの罰金。忌々しい国歌を侮辱すれば、つまり、国歌の演奏中じっと立っておればいいが、そうでなければ 300ルピーの罰金。忌々しい国旗、つまり、ただの布切れ。特別な色に染めただけの象徴。その象徴を侮辱すれば罰金。ソーンナー村に現に生きている掛け替えのない女性のサリーを剝ぎ取れば50ルピーの罰金。国旗も剝ぎ取れば侮辱になるが、国旗をけつに巻く者なんぞありはしない。国家は人によって成り立っている。そこに住む人の苦痛と象徴に対する侮辱の苦痛はどちらが大きいか。大きいどころか、我々の名誉の値段は一枚のサリーほどでしかない。これっぽっちの布切れほどの名誉だ。ダリト女性に対する犯罪こそ国旗に対する侮辱の罰金より重い刑罰でなくてはならぬ。でなければ、人々に愛国心が育つだろうか。」カーストの高い者は好き勝手なことをして、我々を奴隷にしておこうとする。マラーター=カーストというのもなぜクシャトリヤと言えるのか[42]。マハートマー・フレーという偉大な改革者が出たのに、ティラクには社会的平等など無用であった。我々はアンベードカルに従って自らを改革したが、カースト・ヒンドゥーにはそれが我慢できない。我々の自由を阻もうとする者たち、君たちも自由ではないのだ。なぜなら、我々の政府はイギリスの性格を受け継いだ政府であり、我々を奴隷のように扱おうとする政府だからだ。奴隷には自由はない。ダーレーはこのように書いて、独立25周年の意義を否定したのであった[43]。

この文章に最初に反応したのは文中でも批判された女流文学者のドゥルガー・バーグワトで、この文章は彼女に対する名誉毀損であり、国旗に対する侮辱的発言であると非難した[44]。彼女の非難が呼び水となって、右翼政党から会議派に至るまで、また学生らが『サードナー』の事務所に激しい抗議運動を行った結果、編集者と出版者が辞表を出し、社会党の重鎮であるS.M.ジョーシーが謝罪するなどの事態に発展した。ダリトパンタル側も反発し、ボンベイからも押し掛けてプネーでデモ行進を行った。こうして、ダリトパンタルは一躍有名になったが、特にダーレーの文章は各地のダリト青年を勇気付け、行動に立ち上がる切っ掛けを与えた[45]。共和党の凋落によって、展望を見出せなかったダリト運動はここに大きな転機を迎えたのであった。

3. ダリトパンタルの活動（前期）

(1) マニフェスト『ダリトパンタルの立場』

『サードナー』事件を切っ掛けに、ダリトパンタルは一躍有名になり、各地に支部が続々誕生した。当局側が把握しただけでも、73年6月までの1年間にボンベイだけで32の支部ができていた。州内の大きな都市は勿論、地方の田舎町にまで支部ができ、州外のデリー、アーメダバード、ボーパールなどの都市にも支部が開設された[46]。

組織はこのように思いもよらない速さで拡大したが、組織の基本的な綱領さえなく、各地の支部はばらばらに活動しているという状態であった。このため、ボンベイの本部は急いで綱領を作成し、人事を決めるなど組織を整える必要があった。まず、人事については73年5月20日に、議長ラージャー・

ダーレー、書記J.V.パワール、副書記バーイー・サンガーレー、出納A.マハーテーカル、防衛担当ナームデーオ・ダサール、などを決定した[47]。組織は集団指導体制にすることが申し合われたが、主導権をめぐる争いはすでに存在し、特にダーレーとダサールの間が険悪であった。

組織の運営については、当初、具体的な規則はほとんど存在していなかったと言われている[48]。会員登録はなく、決まった会費もない。運営費はもっぱら寄付に頼っていた。入会がほぼ自由であるので、マフィアと繋がりのあるような者もダリトパンタルの名を使ったりする。専従の活動家もいない。組織としての意思決定に決まったルールがなく、中央と支部との意思の疎通が十分に行われない。これらのことは組織の運営にとって重大な欠陥であって、後にワルリー騒乱事件などの大きな事件が起こったとき、組織としてのまとまった対応ができないという結果を招いた。

組織の存立にとって最も根本的な課題は、組織の基本的な立場、目的をはっきりさせることである。ダリトパンタルでこの作業をしたのはダサールで、彼は『ダリトパンタルの立場』(Dalit Pantharci Bhumika) と題する文章をまとめ、発表した[49]。ダサールがこれを発表した正確な日付は不明であるが、73年9月頃である[50]。この文は74年2月に殆ど同じ文章のまま『ダリトパンタル宣言』(Dalit Pantharca Jahirnama) と改称されている。

ダサールはまず、独立後の会議派政権下で、ダリトの状態は改善されるどころか、さらに悪化したと言う。この状況と闘うためにはダリトの問題を正しく理解する必要がある。「……ダリトの問題は単にダリトだけの、即ち不可触民だけの、あるいは、村の外や経典の外に置かれた者たちだけの問題ではない。ダリトとは不可触民のことであり、同様に労働者、土地のない農業労働者、プロレタリアートのことでもある。これこそダリト本来の革命的な姿であり、これを育てなければ、我々に未来はない。ダリトはダリトを補完する勢力や大衆を受け入れなければならない。そうすることによって我々は敵と闘うことができる。そうならなければ、我々は奴隷以下の状態で苦しま

ねばならないだろう」会議派は封建的な勢力のために独立運動を闘い、ガーンディーはダリトを弄んだ。独立後は社会主義を語りながら、今日までダリトや貧しい農民・労働者を蹂躙してきた。野党は選挙のことばかりに気を取られ、ダリトの問題に取り組んでこなかった。このように与野党の政治を批判した後、ダサールの追及は共和党に向かう。

「今日、ダリトのみならず、あらゆる社会の問題は、社会的、政治的、宗教的の如何を問わず、宗教とカーストの枠内で解決することはできない。これは1952年の選挙に敗北して、バーバーサーヘブが理解したことであった。……彼は当時の指定カースト連盟を広範な基盤を持つ政党に変えることを望んでいた。しかし、これは彼の存命中には実現しなかった。彼の死後、彼の後継者たちはただ党名を共和党と変更しただけで、カースト主義の政治を始めた。村の外に追いやられている全てのダリトや経済的に搾取されている人々を糾合することはなかった。何よりも重大な点は、ダリトという革命的な集団の政治をこの党が議会主義的な方法で行ったことである。共和党は選挙、請願、保留枠、優遇措置などの問題に巻き込まれてしまい、村々に散在するダリト社会は政治的には相変わらずのまま取り残された。党の主導権はカースト内の中産階級の手に渡り、彼らは派閥を作り、私利私欲に走り、党を分裂させた。」ダサールはアンベードカルの名を語って私欲を諮る指導者たちを非難し、ダリトを今日の窮状に追いやった責任を共和党に帰しながら、次のように続ける。「共和党は何をしたか。ヤシュワントラーオ・ツァヴァーンのような腹黒い権力者の投げた網に絡め取られてしまって、党は輝きを失い、団結を失い、不能者が満ち溢れた。このような不能な指導者に我々の未来を託したら、我々も滅びてしまうだろう。それゆえに我々は、我々と共和党には最早血縁関係はないと、首を垂れつつ表明するものである。」

このあと、ブラックパンサーら外国の非抑圧者との連帯に触れてから、ダサールはダリトの定義をする。

「ダリトとは誰か。指定カーストと指定部族、仏教徒、勤労大衆、労働者、土地を持たぬ農業労働者、貧農、放浪部族、原住部族。

我々の友人は誰か。1）ヴァルナ制と階級制を破壊する革命政党。真の意味での左翼政党。2）経済的、政治的な圧力の犠牲となった他の全ての社会集団。

我々の敵は誰か。1）権力、富、既成の権威。2）地主、資本家、高利貸し、および彼らの手先。3）宗教的、カースト的政治をする政党とそれらを保護している政府。

今日のダリトの緊急の課題。1）衣食住。2）就職、土地、不可触民制。3）社会的、身体的受難」

ダサールはさらに、ダリトの解放闘争は全体的な革命を求めているとしたあと、大きな活字に変えて次のように続ける。「我々はバラモン街に土地が欲しいのではない。我々は国全体の支配権が欲しいのだ。我々は単なる個人ではなく、体制に注目している。改心とか寛容を教えることで我々に対する非道や搾取が止むものではない。革命的な大衆を覚醒し、組織化すれば、その巨大な大衆の闘争の中から、革命の波が起こるであろう。」

ダリトパンタルは口先だけの宣言をするのではなく、実際の行動で不可触民制や搾取と闘うであろうとして、ダサールは18カ条に及ぶ要求項目を挙げている。それらを簡単に纏めると、1）ダリト農民への土地分配、2）農村でのダリト抑圧禁止、3）無土地農民への農地分配促進、4）農業労働者の賃金値上げ、5）公共井戸開放、6）ダリトの住宅を村内に、7）全ての生産手段をダリトに、8）搾取阻止、9）社会主義の実現、10）ダリトの就職保証、11）失業手当て支給、12）無償教育、13）教員採用にカースト、宗教などを不問とすること、14）宗教界への補助金停止、15）宗教主義的、カースト主義的文学の禁止、16）軍隊のカースト別組織化の中止、17）闇市場の

取締、18）生活必需品の値下げ、となっている。そして、最後の一節を次のように書いている。

「我々は都市の工場と農村において、労働者、ダリト、無土地者、農業労働者を組織しよう。そして、ダリトに加えられる暴虐に立ち向かおう。人民を苦しめ、搾取するジャーティ制、ヴァルナ制を破壊し、真の意味でダリトを解放しよう。ダリトに対する暴虐には目には目をで対抗しよう。現行の司法制度、行政制度は我々の全ての夢を打ち砕いてしまった。ダリトに対するあらゆる非道な仕打ちを一掃するにはダリトが権力を握らねばならない。その権力こそ真の人民の民主主義である。ダリトパンタルのメンバー諸君、支持者諸君、ダリトの最終目標の闘いに備えよう」

本文はここまでで、このあと余白の部分に大きな活字で、全ての権力をダリトの手に、ダリトパンタル万歳、ジョーティバー・フレー万歳、バーバーサーヘブ・アンベードカル博士万歳、とスローガンを書き、裏表紙にはアンベードカルの写真に、「カーストのない、階級のない社会を作り上げない限り、真の自由は訪れない」というアンベードカルの言葉を添え、最後にもう一度、全ての権力をダリトの手に、というスローガンを書いて締めくくっている。欄外には出版者として、ダリトパンタル防衛大臣、ナームデーオ・ラクシュマン・ダサールと記してある。ちなみに表表紙にはパンタル（豹）の絵が描いてあるが、何となく猫のように見える。

ダサールの『ダリトパンタルの立場』は後に『ダリトパンタル宣言』と改称されたこともあり、公認のマニフェストと理解されることが多い。評論家の中にもこれを公認のマニフェストとして論評している人がいる。しかし、実際にはこれは機関の承認を受けたものではなく、ダサール個人の考えに過ぎないものであった[51]。ところが、74年10月にダリトパンタルがダーレー派とダサール派に分裂したため、ダサール派は当然のごとくこの文章をマニフェストとして使い続けることになった。後にダーレー派は解散して新しい組

織に変わり、ダサール派も殆ど自然消滅に近い形で消滅した。ダリトパンタルは新しい人々が担っていくようになり、新しいマニフェストもできたが、初代のダリトパンタルのような力量はなく、時代も変わってしまった。ダリトパンタルの存在が殆ど話題にもならなくなった現在、ダリトパンタルのマニフェストというと、ダサールの『ダリトパンタルの立場』を指すのが通例であり、また、それだけの力を持った文章である。

(2) ワルリー騒乱事件

1973年2月のボンベイ市議会選挙で共和党はシヴセーナー及び会議派の一部と選挙協定を結んだ。ダリトパンタルはその協定に反対し、投票ボイコットを呼び掛けた。共和党は選挙前に有していた議席を失い、またも惨敗した[52]。シヴセーナーはこの選挙で現有議席以上は確保したものの、ダリトパンタルとの衝突はいよいよ避け難い情勢となった。すでにサードナー事件以来、両者の衝突は見られたが、ダリトパンタルの勢力が拡大すると、それまでシヴセーナーに寄っていた指定カーストの学生や失業青年らが大挙してダリトパンタルに移動したため、シヴセーナーにとって軽視できない事態となってきたのである[53]。

9月にダサールはマニフェストを発表し、右派共産党（CPI）寄りの姿勢を強めていった。73年は前年からの飢饉が続いた年で、経済がさらに行き詰まり、社会不安が増大していた。共産党はストライキ戦術で会議派政府に揺さぶりをかけ、73年12月末から74年2月にかけてボンベイの繊維労働者が長期ストを敢行した。このストはダリトパンタルも支援した。

会議派は各地の選挙で敗北が続き、退潮傾向が明らかであった。そのため、74年1月にボンベイ中央選挙区で予定されていた連邦議会下院の補欠選挙は、中央政府にとっても、マハーラーシュトラ州政府にとっても、会議派の巻き返しのために重要な選挙であった。この議席は会議派のR.D.バンダ

ーレーが占めていたが、ビハール州知事に任命されたため、空席になったのであった。なお、R.D.バンダーレーはかつての共和党の幹部で、会議派に鞍替えした最初の人物であった（120ページ参照）。会議派はシヴセーナーの他に共和党の２派、即ち、ガワイー派共和党及びコーブラーガデー派共和党と選挙協定を結んだ。選挙には会議派の他に、大衆連盟党（Jan Sangh）、ヒンドゥー大連合党、右派共産党が候補者を立てた。

ダリトパンタルはもともと政治とは一線を画した運動を目指しており、選挙にも関係しないのが建前であったが、この選挙でまたも共和党が会議派とシヴセーナーに協力したため、共和党支持者に選挙のボイコットを呼び掛けた。特にこの議席が指定カーストの保留議席であるのに、会議派の立てた候補者がカースト・ヒンドゥーであったことが、ダリトパンタルの怒りを大きくさせたのであった。

全国的な退潮傾向と繊維労働者のストライキにより、すでに劣勢に立たされていた会議派にとってさらに頭の痛い問題は、この選挙区がワルリーなど下層労働者の多い地域を含んでおり、ダリトパンタルの動向が選挙の鍵を握っていることであった。そこで会議派はダリトパンタルの切り崩しを画策した。その１例をチェーンドワンカルは次のように伝えている。ダリトパンタルは１月５日に集会を予定していたが、その３～４日前、会議派は選挙協力と引き替えに、１）今後のダリトパンタル支援、２）ダリトパンタル活動家に対する告訴の取下げ、３）１月５日の集会の資金援助、などを持ち掛けた。ダリトパンタル側はこれを拒否するということで幹部の意見がまとまり、１月５日を迎えた[54]。これとは別にダサールは少し曖昧な言い方だが、会議派書記長のシャラド・パワールとダーレーが会い、告訴の取下げなどの話をしたが、それ以外のことは自分（ダサール）には知らされなかったと書いている[55]。ムルグカルは会議派からダリトパンタルに資金が渡った可能性を指摘し、会場に会議派の幹部が来ていたのは、ダリトパンタルによる支持表明を聞くためであったとしている[56]。こうしたことが噂となって流れ、集

会の会場（ワルリー地区のアンベードカル広場）には、会議派とダリトパンタルの関係を怪しむ大衆連盟党やヒンドゥー大連合党の支持者がたくさん押し掛け、緊張した雰囲気の中で集会が始まった。

集会では何人かが演説したが、ダーレーが最後の演説者で、その前にダサールともう１人が演説した。ダサールはヒンドゥー教をからかうようなことを言ったが、会場には目立った反応はなかった。次にアニル・バルウェーが演説した時も何も起こらなかった[57]。最後にダーレーが話し始めると、すぐに混乱が生じた。投石が始まり、警官の制服を着た３～４人が演壇に上がって、ラーティー棒でダーレーに襲いかかった。投石によって会場は混乱に陥り、逃げる人々を警官隊が執拗に追い詰め暴行を加えた。この後に続く一連の騒乱でも警官隊の過激な攻撃が目立ち、この事件の一つの特徴であった。この日、ダーレーら20人が逮捕された。この事件の原因について、マスコミはダリトパンタルがいつものようにヒンドゥー教を罵ったことが原因と報じたが、これは調査委員会によって否定された。会議派との選挙協力をダリトパンタルが表明しないので、約束が違うと怒った会議派が仕掛けたとする説もあるが、これも真相は明らかでない[58]。

ダリトパンタルは事件に抗議するため、１月10日、デモ行進を行った。デモ隊がシヴセーナーの支持者の多い地区に入ったとき、建物の上からの投石により、ダリトパンタルの活動家が１名死亡した。これにより、この後の対立はシヴセーナーを中心とするカースト・ヒンドゥーと警官隊対ダリトパンタルという構図になった。

騒乱の舞台となったのは主にワルリー地区やナーイガーオ地区にあるボンベイ市営アパート街で、121棟あるアパートのうち、29棟は仏教徒、31棟はヒンドゥー、19棟は警察関係者がそれぞれ専用とし、他の棟は混住であったり他宗教や他州の出身者などが住んでいた[59]。警官隊がダリト大衆に対し異常に暴力的であったことの背景には、警察官の多くがカースト・ヒンドゥーであったことの他に、こうした住宅事情もあったのである。騒乱は４月中旬

まで断続的に続き、死者７名を出した。途中、１月13日に投票が行われた連邦議会下院の補欠選挙で会議派が惨敗し共産党の候補が当選したこと、繊維労働者のストが２月まで続いたことなども、この騒乱を長引かせる原因になった。なお、この事件により、警察官がカースト・ヒンドゥーに偏りすぎているというダリトパンタル側の指摘が認められ、欠員補充には指定カーストを優先することを政府に認めさせたのは、この事件の数少ない成果の一つであった。

(3) 第１次分裂

ワルリー騒乱事件はダリトパンタルに様々な影響を与えた。それらは組織の外側と内側の双方から起こり、次第に一つの結末へと導いていくものであった。

下院の補欠選挙に破れた会議派はダリトパンタルの力を殺ぐことの重要性を改めて認識した。それには仏教徒を会議派陣営に引き付けねばならず、その仲立ちができるのは共和党しかなかった。そのためには分裂している共和党の統一が不可欠で、この作業を会議派はD.ループワテーに命じた。ループワテーは共和党から会議派に鞍替えしていた政治家で、当時、州政府の福祉担当大臣であった。早速、統一大会の宣伝が行われ、同時にダリトパンタル非難も行われた。１月26日の統一大会は非常な盛り上がりを見せ、チェーンドワンカルによると、これを境にダリトパンタルの人気が下がったから、会議派の思惑は成功したのであった[60]。

これより前の１月21日、ダサールは騒乱事件の抗議と繊維労働者のストに連帯する集会で演説したが、マスコミはその言葉尻を捕えて、ダサールがコミュニスト宣言を行ったと大きく報じた[61]。これを巧みに煽ったのがダーレーで、ダサールは組織の内外でコミュニストの烙印を押され、次第に孤立していった。ダリトパンタルの結束が乱れることは会議派、共和党、社会党な

どには好都合であった。社会党はダサールが共産党に接近するのを阻止し、ダリトパンタルに社会党の影響を残しておきたかった。こうした外部からの揺さぶりもあって、ダーレーとダサールの溝は深くなるばかりであった。

ダーレーはサードナー事件で一気にダリトパンタルのスターになった。当初は激しい言葉遣いでダリトパンタルの戦闘性の象徴的存在であった。しかし、一方では仏教に強く惹かれており、アンベードカル思想にも忠実であろうとしていた。ワルリー事件の後、その傾向が一段と強くなり、74年６月に仏教に改宗した。ただ、仏教にこだわるあまり、仏教徒でない人々との連帯に支障が生じることもあった。組織内にあっても、やや独善的で、高圧的なところがあったとも言われている。ダサールに対してはモラルの乱れを常に批判していたが、下院補選にからんで会議派から金銭が動いたことを逆にダサールから追及され、中傷合戦に発展して２人の対立は泥沼化した[62]。

２人のもう一つの対立は『ダリトパンタル宣言』の内容に関するマルクス主義とアンベードカル主義をめぐるものであった。ダサールの主張はマニフェストに明らかであって、彼はダリトパンタルの運動に階級闘争の性格を持たせようとしたのであった。そうした背景には共和党の現状に対する批判があり、即ち、活動が仏教徒やマハール=カーストにほぼ限定されているという現状が、アンベードカルの共和党構想を持ち出すまでもなく、望ましくないからであった。ダサールはマニフェストによってダリト運動をカーストの枠を越えた広範な大衆に広げていくための一つの方向性を示したのであった。

これに対しダーレーは、マニフェストにはアンベードカル思想が殆ど反映されておらず、アンベードカルの名を使って、マルクス主義の宣伝をしているだけだと非難した。たとえば、ダサールの挙げた18カ条の要求項目のうち、カースト闘争に該当するのは５）公共井戸開放、と６）ダリトの住宅を村内に、の２つだけで、あとは全てマルクス主義思想に基づくものだと言う。しかも５）と６）も純粋にアンベードカル思想のものではなく、バーバ

ー・アーダーヴの「1村1井戸運動」の借り物に過ぎないという。アンベードカル思想に基づくなら、井戸をダリトの居住区に作り、カースト・ヒンドゥーがそこへ水を汲みに来るぐらいでなければならない。また、村長職をダリトが握ることが最も基本的な課題であるという。他にも多くの点を挙げて、ダーレーは批判を加えているが、批判のための批判のような箇所もある。さらに批判は内容だけでなく、元の『立場』が『宣言』に改称されて出版されることになった事情にも及んでいて、ダーレーはこの件が彼に全く知らされなかったことを非難し、そもそも『宣言』はダサールの私物にすぎないと切り捨てた[63]。

ダサールは詩人であり、奔放な生活を信条としているようなところがあった。最底辺の人々の間で暮らし、大衆に人気があったが、好き勝手な振る舞いをし、無節操であるという批判を受け続けた。早くから社会党や共産党に混じって活動したので、左翼的な傾向を有しており、ダリト運動に階級闘争の性格を持たせようとしたのはマニフェストに明らかである。彼はこのマニフェストをディゲーという元ナクサライトの活動家の協力を得て書いた。ダサールがコミュニスト寄りであることは確かで、彼の妻マッリカーは有名なコミュニスト詩人アマル・シェイクの娘であった。アンベードカルがコミュニストを嫌っていたとされていることから、コミュニストと呼ばれることはダリト運動内で場所を失うことに等しく、ダサールは次第に孤立していった[64]。

組織の分裂については、7月頃からマスコミが報じるようになり、分裂回避の努力もなされたが、74年10月、ダリトパンタルは主流派のダーレー派と追放された形のダサール派に分裂した。

4. ダリトパンタルの活動（後期）

(1) 分裂、解散、再生

74年10月23日から24日にかけて、ナーグプールでダーレー派は結成大会を開き、新しい綱領を採択した。規約ではメンバーは18歳以上、政党に無関係で、酒を飲まないことなどとなっていて、ダサール追放の教訓を思わせる。特にダサールや共産党と関係した者には厳しくしたため、批判されたサンガーレーとマハーテーカルの幹部2人が75年10月に分裂した。2人はダーレーが仏教に偏り過ぎ、運動が穏健になったこと、ダーレー個人は相変わらず権威主義的で自己中心的であると批判した。また、地主に目を潰されたガワイー兄弟事件の見舞い金をダーレーが着服したとも付け加えた[65]。

分裂後、ダサールは拠点をプネーに移していた。彼とは共産党系の活動家が行動をともにしたが、コミュニスト批判が相変わらず続いたため、特に過激派であるとして、ディゲーらの除名に踏み切った。当時のジャイプラカーシ・ナーラーヤンの運動の評価をめぐって、ナーラーヤンを評価しないダサールと意見が合わなかったことも原因であった。ところが、この除名措置が幹部の支持を得られず、逆にダサール自身が少数派になってしまった。動揺したダサールはいきなりニューデリーへ行き、非常事態を発令したばかりのガーンディー首相に面会して、会議派への協力を申し出た。これは突飛な行動に見えるが、74年5月にダーレーの詩集『ゴールピター』が州の文学賞を受けたときから、一部で予想されていたことであった。プネーに戻ったダサールは活動を再開したが、非常事態を強行した会議派と組んだことですっか

り信用をなくしていた。一方、一旦はダサールを追い出した形のディゲーらは、非常事態のために地下に潜るなどして姿を消してしまった[66]。

会議派と組んだダサール派が活動を続けていたのに対し、ダーレー派は非常事態中さしたる活動もできなかった。強いて挙げれば、ナーグプールでダリト文学大会の開催に関わったこと（76年1月）[67]や、ガワイー兄弟事件の補償問題で州首相から約束を取り付けたこと（76年1月）ぐらいであった[68]。活動が鈍ったのは政治的に目立つことをして逮捕されたり、ワルリー騒乱事件の調査に悪い影響を及ぼすことをダーレーが恐れたからという説もある。ダーレーは76年10月のナーシクでの集会でダリトパンタルを解散する意向を表明した。一部の幹部が私欲に走っていること、ダリトパンタルは政治には関わらない方針であるのに、77年の総選挙に向けて勝手に政党と交渉を進めている者がいること、などをダーレーは解散の理由とした。解散はひとまず見合わされたが、ダーレーのこの意思表明は周囲を動揺させた[69]。

77年に入ると、ダサール派は3月の総選挙に向けてガーンディー首相支持の運動を繰り広げた。ダーレーはダリトパンタルの名が選挙に翻弄されるのを嫌って、3月7日、抜き打ち的にダリトパンタルの解散を発表し、新組織マスムーヴメントの結成を発表した。新組織は仏教とアンベードカル主義に基づき、平和的に運動を進めようとするもので、政治には関わらないことを活動の基本とした[70]。

ダーレーが独断でダリトパンタルを解散したことは、多くの同志を混乱に落とし入れた。ダリトパンタルの存続を望む人々は4月11日オウランガーバードに集まり、A.カーンブレーを議長としてマハーラーシュトラ・ダリトパンタルを結成した。同組織は後に名称をバーラティーヤ・ダリトパンタル（BDP）と変えた[71]。BDPは10カ条からなる運動目標を纏めたが、その中にはマラートワーダー大学の名称変更に関する要求も入っていた[72]。

77年3月、ガーンディー政権が倒れ、非常事態は終了した。史上初の非会議派政権が誕生し、社会に新しいことが起こりそうな予感が広がった。8

月、仏教徒の団体が新首相デサイに面会し、指定カーストからの改宗仏教徒にも普通の指定カーストと同様の優遇措置が与えられるように求めたところ、デサイは改宗は自分がお願いしたことではないと言って拒絶した[73]。ダリト運動の古くて大きな課題はこうして新時代にもそのまま引き継がれることになった。

(2) マラートワーダー大学改称運動

マハーラーシュトラ州の中部に位置する7つの県、つまり、オウランガーバード、パルバニー、ビード、ウスマーナーバード、ナーンデード、ジャールナー、ラートゥールの7県は一纏めにしてマラートワーダーと呼ばれている。マラートワーダーはかつてハイデラバード藩王国の領土であった地域で、言語州編成によって1956年にボンベイ州に編入されたのであった。この地域は現在でも州内の後進地域と呼ばれているが、住民の約8割が農業関係で、産業は発展していない。また、仏教徒と指定カーストが住民の約17%を占め、州平均の12%を遙かに上回っている[74]。こうした地域なので、教育も遅れており、アンベードカルが1950年、オウランガーバードに文理科カレッジ（現在のミリンダカレッジ）を建てた時には、マラートワーダー全体でジュニアカレッジが1校しかないという状態で、しかも、ハイデラバードのオスマニア大学の傘下であった。56年にボンベイ州に編入され、オスマニア大学から切り離されると、地元の大学が必要になり、58年にマラートワーダー大学が設立された。この時、大学名の原案にいくつかあって、ドクター・バーバーサーヘブ・アンベードカル大学という名称も原案に入っていたが、当時は人名を大学に付けるという習慣がまだ広まっていなかったので、その名称は見送られたのであった[75]。

マラートワーダー大学の名称をアンベードカル大学に変更する要求が具体的に出されたのは1974年のことであった。この年、マラートワーダー共和学

生連盟（Marathwada Ripablikan Vidyarthi Sangh）という団体が州首相宛てに、大学にアンベードカルの名前を付けて欲しいと手紙を送ったところ、マラートワーダーにある２つの大学のどちらかにアンベードカルの名前を付けることについての提案を記録したという返事が首相秘書室より送られてきた[76]。この後、要求運動がどの程度に行われたのか具体的なことは分からないが、少なくとも表立った運動にはなっていなかった。

改称要求が具体的な運動になるのは77年のことで、この年の５月、アンベードカルが指導したマハード・サティヤーグラハの50周年を記念して開かれた集会でこの要求が出されたのであった。誕生したばかりのバーラティーヤ・ダリトパンタル（BDP）が逸早くこの要求を取り入れているのは前に見た通りである。州首相V.パーティールは好意的に反応し、前向きな姿勢を見せていた[77]。

オウランガーバードの学生や青年の団体は大学改革やその他の要求を掲げて、７月17日、学生行動協議会（Vidyarthi Krti Samiti）を設立した。協議会に加入した団体には青年革命党（YKD）、青年会議（Yuvak Congress）などと並んで、ダリト青年戦線（Dalit Yuvak Aghadi）、青年共和党（Yuva Ripablikan）、ダリトパンタル（BDP）などの名も見える[78]。また、諸要求の一つに大学名称変更も加えられた。学生行動協議会は翌18日ストを決行、大学は休校になった。ところで、この日、ダリトパンタルは協議会とは別行動をとった。ダリトパンタルは大学名称変更の要求はダリト団体独自のものであり、協議会はこの運動に立ち入るべきでないと主張した。ダリトパンタルは運動の主導権を取りたいと焦って、他の団体との連帯を自ら断ち切り、孤立したのであった[79]。因みに、かつて73～74年に指定カースト学生の奨学金値上げ運動があった時にも、運動の主導権を巡って同様のもめごとが生じたことがあった[80]。その時の経験はここには活かされなかった。

一方、改称に反対する動きもこの日から出始めた。この動きはオウランガーバードのみならず、マラートワーダーの他の地域にも急速に広がり、各地

のカレッジで改称反対のデモが行われるようになった。この空気を察知した学生行動協議会は、ダリトパンタルへの反発もあって、改称反対派に合流した。反対運動はますます強まり、９月12日から26日まで学校閉鎖が続いた。12日の反対派学生のストにはオウランガーバード県の学生１万9000人のうち１万1000人が参加した[81]。

当初、改称派が出した新しい名称の案はドクター・バーバーサーヘブ・アンベードカル大学というものであった。つまり、マラートワーダーという地名が入っていなかった。反対派はこれを理由にした。そこで、政府はドクター・バーバーサーヘブ・アンベードカル・マラートワーダー大学という折衷案を出した。地名が認められたことで、反対派には反対の理由がなくなった筈であったが、反対運動は一向に収まらなかった[82]。反対理由には色々あって、ナーグプールは仏教改宗の土地だから、ナーグプール大学を改称すればいいとか、アンベードカルのような偉大な人物の名をマラートワーダーのような狭い所に閉じ込めるのは良くないというような一応尤もらしい意見から、卒業証書にアンベードカルの写真がついて、ジャイビームという語（アンベードカルを称える挨拶の言葉）が卒業証書の縁飾りに使われるから嫌だという出鱈目なものまであった[83]。しかし、実際には、ダリトが優遇措置で土地を得たり、教育や就職の面で有利になっていることへの反発と、「アンベードカル博士がかつてのマハール=カーストの者なので、彼に対する妬ましさがマラートワーダーの非ダリト大衆や学生の間に生じた」[84]というのが実情に近いであろう。改称賛成派は９月23日、市民学生行動協議会（Nagarik Vidyarthi Krti Samiti）を設立して、運動の巻き返しを計った。設立大会にはダリトパンタルの他、人民党（Janata Parti）、右派共産党、左派共産党、共和党、会議派など主だった政党が参加した[85]。この間、すでに７月25日には大学の評議委員会は改称に賛成する決定をし、州議会に伝えた。９月に入ると、州首相パーティールは関係者から事情を聞き、ドクター・バーバーサーヘブ・アンベードカル・マラートワーダー大学という前述の折衷案を出し

て、一旦は了解を取り付けたが、その後の反対運動が激しいため、議会にかけることを見送った。これには翌78年２月の州議会選挙への思惑もからんでいた。

選挙でパーティール政権は与党を維持したが、改称問題の結論は出せないでいた。そして、ついに６月25日に改称は行わないと発表した。ところが、間もなくパーティール政権は倒れ、７月19日に進歩的民主戦線（Progressive Democratic Front）のシャラド・パワール政権が誕生した。パワール首相は一転、改称に積極姿勢を取り、７月27日に州議会で改称法案を全会一致で可決成立せしめた。夕方のニュースがこれを伝えたちょうど30分後、賛成派の人々がまだ喜びを味わいきれないうちに、マラートワーダー各地で一斉に暴動が始まった。

暴動は７月27日から８月６日まで続いたが、容易周到な根回しが行われていたのではないかと疑わせるほどのものであった。つまり、７月31日までは暴動は主に都市部で発生し、交通、通信、政府の施設などの連絡網を徹底的に破壊した後、８月１日から農村部の襲撃を始めるという２段階の暴動であったからである。襲撃を受けたのは殆どが仏教徒とマハールであった。最も激しかったのはナンデード県で、被害全体の半数以上を記録している。被害の統計は発表者によりまちまちだが、マラートワーダー全体で死者19名、破壊されたり焼かれた家は1725軒、被害を受けた人は１万5250人に上るとされる[86]。

事態の収拾に苦慮したパワール首相は８月４日、議会の決定は最終的なものではないと発表した。これにより、ようやく暴動は鎮静に向かった。改称賛成派は首相の発表に抗議したが、もはや実行力は伴わず、この後、改称運動を再開するのに１年間の空白を要した。市民学生行動協議会は事件発生１周年の79年７月27日、集会を開き、12月６日にロングマーチ（Long March）を行うと発表した。これはマハーラーシュトラ各地から行進を連ねて12月６日にオウランガーバードに集結し、大集会を開いて大学の改称実施と事件の

抗議を訴えようというもので、各界からの賛同を得た[87]。とりわけ、この運動に熱意をもって取り組んだのはナーグプールのY.カワーデーで、彼はマスムーヴメントのメンバーであったが、この運動に批判的なダーレーの意向を無視し、自ら改称行動委員会（Namantarvadi Krti Samiti）を組織して改称運動に取り組んできたのであった[88]。

ロングマーチは成功裡に終ったが、この後、改称運動は下火になった。反対勢力は揺るがず、この問題を取り上げる勇気はどの党の政治家にもなかった。何よりも運動に水を差したのはダリト陣営の指導者達で、81年９月に時の州首相アントゥレーがダリト指導者を集めてこの問題を協議した時、それぞれがばらばらな回答を行ったのであった。ダーレーは新たな仏教大学の設立を要求し、ダサールはコーンカン地方に新設予定の工科大学にアンベードカルの名を付ければいいと言った。共和党のガワイーはカルナータカ州のカンナダ大学にアンベードカルの名を要求し、もう一つの共和党のコーブラーガデーは自分達が自力でアンベードカル大学を建てると豪語した。マラートワーダー大学の改称実施を議会の決定通りに要求したのはカワーデーとダリトパンタル（BDP）のR.アータオレーだけであって、この話し合いは見事に決裂した[89]。この日はダリトパンタルが切り開いてきたダリト運動の終焉を思わせる象徴的な日であった。

改称運動はこの後細々と続けられ、改称が実現したのは94年１月14日のことであった。1991年はアンベードカルの生誕百年が祝われた年で、これを記念する出版事業などが行われたが、それと同時にマラートワーダー大学の改称問題が再び話題にのぼった。ダリト運動は久し振りに活気を取り戻し、抗議運動から焼身自殺者が出るほどになったため、州政府も放っておけなくなった。しかし、今回はシヴセーナー以外とくに反対運動もなく、94年１月14日の決定は平穏に行われた[90]。現在、大学の正式名称はドクター・バーバーサーヘブ・アンベードカル・マラートワーダー大学という。

ダリトパンタル（BDP）は現在も組織は存在しているが、殆ど機能してい

ないと言っても過言ではない。かつての指導者達の多くは現在、共和党にいる。

おわりに

以上、70年代のダリト運動に一つの時代を画したダリトパンタルの活動を追ってみた。本文中に記したように、ダリトパンタルは当時のダリト大衆の窮状を見兼ねたダリト青年がカースト・ヒンドゥーの暴虐からダリト大衆を守るために起こした団体であった。本来ならその役割は共和党が担うべきであったのに、共和党は指導者間の主導権争いから分裂を繰り返し、ダリト大衆のための活動をなおざりにしてしまっていた。指導者達は自分の政治的利益を守るためには主義や原則をいとも易々と放り出してしまうのであった。ダリトパンタルはそういう共和党を激しく批判し、特に都会のダリト青年を中心に熱烈に迎えられた。しかし、そのダリトパンタルも70年代末には、自ら批判した共和党と同じ道を歩んでしまっていた。

原因はいくつか挙げることができよう。指導者個人の資質を問うこともできる。組織論の未熟さも大きな要素であった。特に指摘されるのは村落部での活動の弱さである。組織は都市部の青年が中心になっていた。彼らが村落部に注意を払わなかった訳ではないが、インドの村落部は圧倒的に広大であり、彼らは極めて少数であった。マラートワーダー大学改称問題の暴動が示すように、反ダリト勢力がまとまって行動を起こすと、ダリト側はなす術がなくなるのであった。しかも、ここで言うダリトとは、仏教徒とマハールにほぼ限定されてしまっている。カーストの枠を越えた連帯というアンベードカル以来の目標はダリトパンタルに至っても実現できなかった。

ダサールのマニフェストはその点を指摘していた。しかし、コミュニスト批判がダサールを萎縮させ、ダーレーの仏教への拘りがマニフェストの精神を歪めてしまった。そして、これらの根底にはアンベードカル思想の影響がある。アンベードカルは今も絶対的な存在であるため、自分の意見がアンベードカル思想に沿っていることを示すことは今も重要な要件である。アンベードカルをどれだけ客観的にとらえ直すことができるかが、今後の大きな課題であろう。

カースト制の問題は社会全体の問題であるため、仏教徒やマハール=カーストだけのレヴェルで問題をとらえても不十分である。独立後の議会制民主主義体制が、票田あるいは圧力団体としてのカーストの役割を再生させたように、優遇措置、いわゆる、リザヴェイションの制度はカースト制を一層強化しつつあるように見える。各カーストはそれぞれ結束を強め、自己主張をする。カーストを越えた連帯は自分のカーストの利益を見て判断するという状況が一般化しつつある。

70年代末からBAMCEF、D-S 4など独特の運動を起こしたカーンシーラームが1984年に創設した大衆社会党（Bahujan Samaj Party, BSP）が、わずか10年でウッタルプラデーシュ州の政権の座についたことはマハーラーシュトラのダリト運動にも大きな影響を与えた。1995年12月、それまで8つの派閥に割れていた共和党は、今度こその誓いを立てて統一団結した[91]。その顔ぶれを見ると、ダリトパンタルで馴染みの、ダーレー、ダサール、カワーデー、アータオレーらがいる。かつて「血縁関係はない」とまで言い切った共和党が彼らの帰り着く先であったとは皮肉であるが、カースト問題を取り巻く新しい情勢の中で、自らの経験とアンベードカルの遺産をどう活かすかが彼らの今後の課題であろう。

注

(1) いわゆる新仏教徒（ネオ・ブッディスト）。ヒンドゥー教のカースト差別を嫌っ

て、アンベードカルの指導で仏教に改宗した人々。殆どをマハール=カースト出身者が占める。

(2) 一般的には「不可触民」カーストを指している。憲法の規定により、一定の保護を受けられるものとして「指定」されているカースト。

(3) *Ajce Prabodhan*, Jul. 20, 1997.

(4) Bhimrao Ramji Ambedkar, 1891-1956。マハール=カースト出身。不可触民解放運動に生涯を捧げた。新仏教徒（ネオ・ブッディスト）の生みの親。

(5) *Front Line*, Aug. 8, 1997, pp. 4-18.

(6) インド中西部の州。州都ムンバイ。不可触民解放運動が早くから起こった地域。

(7) Bharatiy Janta Parti。右翼的なヒンドゥー民族主義政党。1980年結党。近年勢力の伸長が著しい。

(8) Shiv Sena、マハーラーシュトラ州の右翼的なヒンドゥー民族主義的政党。1995年、BJP と州連立政権を樹立した。

(9) *Ajce Prabodhan*, op. cit.

(10) ダリト dalit という語は「押し潰された、踏み躙られた」という元の意味から、「被抑圧者」という意味になり、現在では「不可触民、指定カースト民」という意味で用いられることが多い。従って、ダリト運動とは「不可触民解放運動」というほどの意味になるが、マハーラーシュトラ州では仏教徒やマハール=カーストを中心とした運動になっているため、「仏教徒解放運動」ないしは「マハール解放運動」という狭い意味で理解されることもある。

(11) マハーラーシュトラの英雄シヴァージー（1627-80）が1674年に建てた国。王はマラーター=カーストであるので、マラーター王国と称した。

(12) Sunthankar, B.R., "Social Reform Movement in the 19th Century Maharashtra," V.D.Divekar, ed., *Social Reform Movements in India*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991, pp. 46-47.

(13) Gokhale, J., *From Concessions to Confrontation*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1993, p. 52.

(14) フレーと「反バラモン運動」については、例えば、Gore, M.S., *Non-Brahman Movement in Maharashtra*, 1st ed., New Delhi, Segment Book Distributors, 1989.

(15) Jogdand, P.G., *Dalit Movement in Maharashtra*, 1st ed., New Delhi, Kanak Publications, 1991, pp. 36-37.

(16) Gokhale, *op. cit.*, pp. 65-67.

(17) *Ibid.*, pp. 74-80.

(18) *Ibid.*, pp. 72-73.

(19) マハード市はボンベイ南方の小都市。ここにあるツァオダール貯水池を不可触民

にも開放するように要求した運動。

(20) ヒンドゥー教の聖地の一つであるナーシク（ボンベイの北東約150キロ）にあるラーマ神を祭った有名なヒンドゥー寺院に不可触民が立ち入ろうとした運動。

(21) 不可触民が独自に代表を選出する分離選挙方式案をガーンディーの「死に至る断食」のために撤回し、プーナ協定を結んで代案に合意させられたこと。

(22) 奉仕カーストがその奉仕の代償として得る権利や権益をワタンという。マハール=カーストの場合、極めて僅かな権益のために膨大な奉仕を強いられ、不可触民扱いもされる。奉仕と差別の元凶であるワタンの廃止を求める運動。

(23) Gokhale, *op. cit.*, pp. 179-180.

(24) 言語州再編成によるマハーラーシュトラ州の誕生に向けて、社会党や共産党など左派系野党を中心に1956年に結成された。結成本来の目的以外にも野党として会議派と対決することが多かった。

(25) Kshirsagar, R.K., *Bharatiy Ripablikan Paksh*, 1st ed., Aurangabad, Nath Prakashan, 1979, pp. 79-85.

(26) Gokhale, *op. cit.*, pp. 225-227.

(27) Kshirsagar, *op. cit.*, pp. 151-153.

(28) *Ibid.*, p. 135. 党としての当選は2名だが、マハーラーシュトラ州での当選は1名のみ。他はアーンドラ州で1名。

(29) 共和党の歴史については、Kshirsagar 前掲書。

(30) Murugkar, L., *Dalit Panther Movement in Maharashtra*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991, p. 63.

(31) *Ibid.*, p. 41.

(32) *Ibid.*, p. 40.

(33) Gokhale, *op. cit.*, p. 243.

(34) *Ibid.*, p. 266.

(35) Murugkar, *op. cit.*, pp. 48-60.

(36) *Ibid.*, pp. 38-39.

(37) Dhasal, N., "Dalit Pantharci Gangaulan," Sharankumar Limbale, ed., *Dalit Calval*, 1st ed., Kolhapur, Pracar Prakashan, 1991, pp. 17-20.

(38) Dangle, A., "Nivedan," A. Dangle, ed., *Dalit Sahitya: Ek Abhyas*, 1st ed., Mumbai, Maharashtra Rajya Sahitya-Samskrti Mandal, 1978, pp. xxii-xxiii.

(39) Cendvankar, P., "Pantharca Janma," Sharankumar Limbale, ed., *Dalit Panthar*, 1st ed., Pune, Sugava Prakashan, 1989, p. 35.

(40) Gokhale, *op. cit.*, p. 267.

(41) Jogdand, *op. cit.*, p. 71.

(42) マラーター=カーストは元々農民カースト、即ち、シュードラに属する。地主から

て、アンベードカルの指導で仏教に改宗した人々。殆どをマハール=カースト出身者が占める。

(2) 一般的には「不可触民」カーストを指している。憲法の規定により、一定の保護を受けられるものとして「指定」されているカースト。

(3) *Ajce Prabodhan*, Jul. 20, 1997.

(4) Bhimrao Ramji Ambedkar, 1891-1956。マハール=カースト出身。不可触民解放運動に生涯を捧げた。新仏教徒（ネオ・ブッディスト）の生みの親。

(5) *Front Line*, Aug. 8, 1997, pp. 4-18.

(6) インド中西部の州。州都ムンバイ。不可触民解放運動が早くから起こった地域。

(7) Bharatiy Janta Parti。右翼的なヒンドゥー民族主義政党。1980年結党。近年勢力の伸長が著しい。

(8) Shiv Sena、マハーラーシュトラ州の右翼的なヒンドゥー民族主義的政党。1995年、BJP と州連立政権を樹立した。

(9) *Ajce Prabodhan*, op. cit.

(10) ダリト dalit という語は「押し潰された、踏み躙られた」という元の意味から、「被抑圧者」という意味になり、現在では「不可触民、指定カースト民」という意味で用いられることが多い。従って、ダリト運動とは「不可触民解放運動」というほどの意味になるが、マハーラーシュトラ州では仏教徒やマハール=カーストを中心とした運動になっているため、「仏教徒解放運動」ないしは「マハール解放運動」という狭い意味で理解されることもある。

(11) マハーラーシュトラの英雄シヴァージー（1627-80）が1674年に建てた国。王はマラーター=カーストであるので、マラーター王国と称した。

(12) Sunthankar, B.R., "Social Reform Movement in the 19th Century Maharashtra," V.D.Divekar, ed., *Social Reform Movements in India*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991, pp. 46-47.

(13) Gokhale, J., *From Concessions to Confrontation*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1993, p. 52.

(14) フレーと「反バラモン運動」については、例えば、Gore, M.S., *Non-Brahman Movement in Maharashtra*, 1st ed., New Delhi, Segment Book Distributors, 1989.

(15) Jogdand, P.G., *Dalit Movement in Maharashtra*, 1st ed., New Delhi, Kanak Publications, 1991, pp. 36-37.

(16) Gokhale, *op. cit.*, pp. 65-67.

(17) *Ibid.*, pp. 74-80.

(18) *Ibid.*, pp. 72-73.

(19) マハード市はボンベイ南方の小都市。ここにあるツァオダール貯水池を不可触民

にも開放するように要求した運動。

(20) ヒンドゥー教の聖地の一つであるナーシク（ボンベイの北東約150キロ）にあるラーマ神を祭った有名なヒンドゥー寺院に不可触民が立ち入ろうとした運動。

(21) 不可触民が独自に代表を選出する分離選挙方式案をガーンディーの「死に至る断食」のために撤回し、プーナ協定を結んで代案に合意させられたこと。

(22) 奉仕カーストがその奉仕の代償として得る権利や権益をワタンという。マハール=カーストの場合、極めて僅かな権益のために膨大な奉仕を強いられ、不可触民扱いもされる。奉仕と差別の元凶であるワタンの廃止を求める運動。

(23) Gokhale, *op. cit.*, pp. 179-180.

(24) 言語州再編成によるマハーラーシュトラ州の誕生に向けて、社会党や共産党など左派系野党を中心に1956年に結成された。結成本来の目的以外にも野党として会議派と対決することが多かった。

(25) Kshirsagar, R.K., *Bharatiy Ripablikan Paksh*, 1st ed., Aurangabad, Nath Prakashan, 1979, pp. 79-85.

(26) Gokhale, *op. cit.*, pp. 225-227.

(27) Kshirsagar, *op. cit.*, pp. 151-153.

(28) *Ibid.*, p. 135. 党としての当選は2名だが、マハーラーシュトラ州での当選は1名のみ。他はアーンドラ州で1名。

(29) 共和党の歴史については、Kshirsagar 前掲書。

(30) Murugkar, L., *Dalit Panther Movement in Maharashtra*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991, p. 63.

(31) *Ibid.*, p. 41.

(32) *Ibid.*, p. 40.

(33) Gokhale, *op. cit.*, p. 243.

(34) *Ibid.*, p. 266.

(35) Murugkar, *op. cit.*, pp. 48-60.

(36) *Ibid.*, pp. 38-39.

(37) Dhasal, N., "Dalit Pantharci Gangaulan," Sharankumar Limbale, ed., *Dalit Calval*, 1st ed., Kolhapur, Pracar Prakashan, 1991, pp. 17-20.

(38) Dangle, A., "Nivedan," A. Dangle, ed., *Dalit Sahitya: Ek Abhyas*, 1st ed., Mumbai, Maharashtra Rajya Sahitya-Samskrti Mandal, 1978, pp. xxii-xxiii.

(39) Cendvankar, P., "Pantharca Janma," Sharankumar Limbale, ed., *Dalit Panthar*, 1st ed., Pune, Sugava Prakashan, 1989, p. 35.

(40) Gokhale, *op. cit.*, p. 267.

(41) Jogdand, *op. cit.*, p. 71.

(42) マラーター=カーストは元々農民カースト、即ち、シュードラに属する。地主から

豪族になり、やがて、政治的実権を握って支配層になると、自らをクシャトリヤと称するようになったが、その資格を疑われ続けた。

(43) Dhare, R., "Kala Svatantryadin," Raja Dhare, ed., *Astitvacya Resha*, 1st ed., Mumbai, Pranali Prakashan, 1994, pp. 129-132.

(44) Cendvankar, *op. cit.*, p. 33. 1972年に刊行されたダサールの詩集『ゴールピター』の出版記念会で、ドゥルガー・バーグワトは、売春婦は社会に必要なものだから、社会的名誉を与えるべきだと述べた。これをダーレーが鋭く批判して、売春婦がそんなに立派なものなら、自分がなればいいと言った。それと同じ趣旨のことをダーレーはこの文章でも書いたのであった。

(45) Lavhatre, B., *Vidarbhatil Dalit Panthar Calvalica Itihas*, 1st ed., Nagpur, Kastraib Karmacari Kalyanmahasangh, 1994, p. 4.

(46) Murugkar, *op. cit.*, p. 64.

(47) *Ibid.*, p. 65.

(48) ダサールが書いたダリトパンタルの規約は存在している。ただ、その作成年は記されていない。S.Limbale, ed., *Dalit Panthar*, op. cit., pp. 248-254. この規約がいつから効力を持ったのか、実際にどの程度実行されたのかは不明である。

(49) Dhasal, N.L., *Dalit Pantharci Bhumika*, Mumbai, Dalit Panthar Prakashan, n. d.

(50) Dhare, R., *Jahirnama ki Namajahir: 1*, Mumbai, R. Dhare, 1974, p. 3.

(51) *Ibid.*, p. 5.

(52) Gokhale, *op. cit.*, p. 269.

(53) Murugkar, *op. cit.*, p.127.

(54) Cendvankar, *op. cit.*, pp. 41-42.

(55) Dhasal, *op. cit.*, pp. 27-28.

(56) Murugkar, *op. cit.*, p. 158.

(57) Dhasal, *op. cit.*, p. 30. アニル・バルウェーは元ナクサライト。

(58) Murugkar, *op. cit.*, p. 158.

(59) *Ibid.*, p. 160.

(60) Cendvankar, *op. cit.*, pp. 45-46.

(61) *Ibid.*, pp. 47-48.

(62) Murugkar, *op. cit.*, pp. 94-96.

(63) Dhare, R., Jahirnama ki Namajahir: 2, Nanded, S.M. Pradhan, n.d.

(64) Murugkar, *op. cit.*, pp. 93-94.

(65) *Ibid.*, pp. 73-75.

(66) *Ibid.*, pp. 76-78.

(67) Lavhatre, B., *op. cit.*, pp. 123-129.

(68) *Ibid.*, pp. 62-68.

(69) Murugkar, *op. cit.*, pp. 75-76.

(70) *Ibid.*, p. 79.

(71) *Ibid.*, pp. 80-81.

(72) Kamble, A., "Vatcal," S.Limbale, ed., *op. cit.*, p. 52.

(73) Lavhatre, B., *op. cit.*, p. 192.

(74) Murugkar, *op. cit.*, p. 167.

(75) Dahat, D., *Marathvada Vidyapith Namantaraca Prashna*, 1st ed., Nagpur, Pramey Prakashan, 1981, p. 11.

(76) Gavhane, S., *Namantar Ladha, Ek Shodhyatra*, 1st ed., Mumbai, Parivartan Pablikeshans, 1996, p. 20.

(77) Murugkar, *op. cit.*, p. 169.

(78) Gavhane, *op. cit.*, pp. 22, 27.

(79) *Ibid.*, p. 23.

(80) Gokhale, *op. cit.*, pp. 273-276.

(81) Gavhane, *op. cit.*, pp. 23-28.

(82) *Ibid.*, p. 56.

(83) Dahat, *op. cit.*, p. 21.

(84) *Ibid.*, p. 23.

(85) Gavhane, *op. cit.*, p. 27.

(86) Morkhandikar, R.S.,"Marathwada Riots 1978," *Punjab Journal of Politics*, vol. IX, no.1, Jan.-Jun. 1985, pp. 42-43.

(87) Murugkar, *op. cit.*, pp. 172-173.

(88) Lavhatre, B., *op. cit.*, p. 239.

(89) *Ibid.*, p. 239.

(90) Gavhane, *op. cit.*, pp. 158-166.

(91) *Lokprabha*, Jan. 12, 1996.

参考文献

1．19世紀の社会改革関連

(1) V.D. Divekar ed., *Social Reform Movements in India*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991. マハーラーシュトラについての記述が中心だが、ベンガル、カルナータカ、女性という項目についてコンパクトに纏めている。

(2) Gore, M.S., *Non-Brahman Movement in Maharashtra*, 1st ed., New Delhi, Segment Book Distributors, 1989. 「反バラモン運動」について、フレーから20世紀初頭にかけての代表的な活動家について、分かりやすく纏めている。

2．共和党関連
(1) Kshirsagar, R.K., *Bharatiy Ripablikan Paksh*, 1st, Aurangabad, Nath Prakashan,1979. 党創立から70年代初頭にかけての共和党の歴史を纏めている。
3．仏教徒・マハール解放運動関連
(1) Gokhale, J., *From Concessions to Confrontation*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1993. マラーター王国時代から始めて1980年頃に至るまでのマハール＝カーストの動向を幅広く纏めている。
4．ダリトパンタル関連
(1) Murugkar, L., *Dalit Panthar Movement in Maharashtra*, 1st ed., Bombay, Popular Prakashan, 1991. 誕生から70年代末までのダリトパンタルの活動、長短を分析している。95年に出版されたマラーティー語版は固有名詞の把握に都合が良い。
(2) Lavhatre, B., *Vidarbhatil Dalit Panthar Calvalica Itihas*, 1st ed., Nagpur, Kastraib Karmacari Kalyanmahasangh, 1994. 主にヴィダルバ地方のダリトパンタルの活動を扱っているが、ボンベイとの関係にも触れていて興味深い。
(3) S. Limbale, ed., *Dalit Panthar*, 1st ed., Pune, Sugava Prakashan, 1989. ダリトパンタルに関わった広範な人々が寄稿している。Limbale には現在のダリトパンタル（BDP）についての著作もある。*Bharatiy Dalit Panthar*, Kolhapur, Pracar Prakashan, 1992.

第5章

ニャイ物語の世界

目　次

はじめに
1．ニャイという制度
2．ニャイの物語
3．『ニ・パイナ物語』
4．女の物語／男の物語

押川　典昭